

## II 田鎖式に続く新方式の派生 ～折衷派の出現と台頭～

### 1. はじめに

初めて日本に紹介された速記方式は幾何派だった。一大冒険であった帝国議会における速記の成功は、田鎖式の信頼を確立し、多方面から速記界への新規参入を刺激した。国字改革を目指した国学者、林甕臣初め、ローマ字運動の佐伯功介、川上晃、仮名文字運動の岩村学、マツサカタダノリらが新文字の一つとして速記考案を競った。このように国字改革運動から新方式の名乗りが続き、幾つかの方式が地歩を固めた。武部は、1955年ごろの時点で全流派合わせて70を越える方式が生まれたと書いている。

最初の日本語の速記符号は、欧米流の幾何図形を取り入れて子音と母音の音素を組み合わせて生成される複画符号であった。続いて筆記速度を高めるために画数を減らす折衷符号、さらに一音節一画を目標とする単画符号へ進化が図られた。

折衷派のガントレット George Edward Luckman Gauntlett (1868.12.4—1956.7.29)、単画派の武田千代三郎 (1867.5.27—1932.5.26)、単画派で最初に実用化された中根正親 (1890.10.10—1984.8.16) の3名が、初めてピットマン式に立脚して、新しい流れをつくった。

五十音 44 文字の中で一画化された基礎符号の割合を示す単画符号比率 single-stroke ratio を見ると、複画符号 (田鎖式初版) では 31%であったものから、折衷符号 (ガントレット式) では 43%へ進み、さらに単画符号 (中根式) では 68.1% (ただし濃線、加点を除く) へ高まった。この傾向は太平洋戦争後、線長を 3 種類、4 種類へ増加する方向へ向かい、一音節一画の純単画符号へと進んでいく。

### 2. 折衷派と呼ばれたガントレットの独創性

ガントレット<sup>#3</sup>は、英国で学んだピットマン式の経験をもとに、1899年、ガントレット式日本語速記法を公にした。彼は英文速記の中で、半草書派のグレッグ式 Gregg system、正書法筆記体派のオーシック式 Orthic system<sup>#4</sup>にも堪能であった。

田鎖式初版はグレイアムにならって父音の画線符号の長さを 1 種類としたのに対して、ガントレットはオーシック式のように、線長を長短 2 種にふやすことによって打開しようとした。それは線の長さによって母音を表そうという線表象の戦略であった。その結果、田鎖式では 1 画で筆記できる符号がア列だけであったのに対して、ガントレット式では倍にふやすことを可能にした。母音を除いて書線に 2 種類の長さを導入する発想はそれまで日本の研究者になかったが、有望な手法と受けとめられ、その後主流となった。複画符号と単画符号の中間点にある現実的な符号として、折衷派と呼ばれた。

ガントレット式は、ピットマン式の子音符号を音節符号の母型としてア列に配分し、[P]を[ハ]に、[R]の直線符号を[ラ]に、[W]を[ワ]に、[TH] (有声音) を[ヤ]に割り当てており、ピットマン式を日本語に適応させた派生方式であった。

1890年に、ガントレットはカナダを経て来日し、東京高等商業学校、千葉中学校、東洋英

和中学校, 麻布中学校, 岡山第六中学校, 金沢第四高等学校, 山口高等商業学校等で語学を教授したが, 千葉時代から日本語速記法の開発に着手し, 1899 年「新式日本語速記術」を刊行した。「私が千葉に居た時は割合に職務が閑散であったので, (中略) まだ青年で元気に満ちていた私は, 無法にも, 更に別な新式な日本語速記術を自分自身で発明して見ようと決心し, ピットマン氏の式を基礎として之に着手した」<sup>#3</sup>と回顧している。図 2-1 にピットマン式, 図 2-32 にガントレット式の基礎符号をそれぞれ挙げた。

ガントレット式の創案宣言には, 田鎖式との違いを(1)文字(速記符号)の長短によって母音を異にすること, (2) (速記原文帳上の)罫線内における文字の筆記位置を決めたこと, (3)「わな」及び鉤形(楕円・マル鉤)を用いること, (4)同行累音法(同行縮字法), チクシ法, 四倍形符号, 語尾母音法, 従属母音法及び二重母音法, 複音文字, 前置符号等の考案を創始したこと——とし, それらを独創点として挙げた。

また, 日本語の音列の特徴を利用して, 異なる音に対して同じ線を使用してもよい場合を挙げた。(1)パ行の半濁点はその語の中間か終わりにあるとき省いてよい, (2)/チャー/, /チュー/, /チョー/, /ジャー/, /ジュー/, /ジョー/, /シャー/, /シュー/, /ショー/の長音点の加点は省いてよい。また, 小円サインは(1)マス動詞記号の前, (2)/テ/, /タ/の前にある場合は省ける, (3)日本語では促音は濁音や/ナ/, /ハ/, /マ/, /ラ/, /ワ/の前につかないから, 促音の書き方で撥音を示すものとする。武部はこれが以後, 日本語方式の開発方針の一つとなったと見ている。

「英語にては母音よりも子音を記す方肝要なれども日本語に於いては然らず。子音母音共に明記せざるべからず。英語にてはKKの子音に適宜の母音を付けて読むも七, 八語以上に用いられることなし。然れども日本語に於いては優に二十六語に用いることを得るなり。是を以て字母を以て記す法を用いることを得ず。」とガントレットは英語と日本語の音声構造の相違点を挙げている。

そうして独創の第4点として, ガントレット式では, 日本語固有の言葉における音列の規則性に着目して, 同行累音法を立てた。その一例として, /ka/, /ki/, /ku/, /ke/, /ko/のように同じ子音を持つ同行の音節が続く場合, 線分である第二音節の子音ストローク部分を省き, 母音サインだけを書いてあらわす方法を考案した。この同行累音法によって, Kaki → Kai(Oyster), Sosogu → Soogu(flow into), Tatoeba → Taoeba(for example)のように併存する子音の後方部分を省いて書くことにした。

日本語の音列にある母音の連続現象は先人が見つけていた。開音節の日本語では, /kokoro/, /akasaka/のように同じ母音が繰り返され, あるいは同じ子音が繰り返されることがある。同じ母音が続く場合, 清澤は「傍聴筆記新法獨學全」で略字法において「同格の符号連続するとき其一方を取って代用するが如き」とし, また丸山の「ことば乃寫眞法」では疊呼のア経(行)疊字においても認められる。この筆法は, 1883 年, 若林が矢野の依頼に応じて口述速記した符号の「紀元前」において同行累音法つまり同行縮字法として運用された。つまり, 田鎖綱紀の発案が先行したと考えられ, ガントレットは同じ着想を得た

こととなる。

また、日本語の語彙において、音構造で2音目に/Chi/, /Ku/, /Shi/ が出現する音韻特徴を見出してチクシ法と呼ぶ縮記法を創案した。これら3尾音に対してストロークには従属するサイン（例えば大円、小円、フック）を充てて表記することにした。これにより、速記符号における単位符号当たりの音声負荷量を高めることができた。ちなみに、速記技術において縮記とは、図形的には「ストローク」（画線）と呼ぶ基本的な表音符号に対して、より少ない筆記負荷の「サイン」（微小記号）と呼ぶ簡単な表記に置き換えることをいう。

さらに、有声音のば行(/ba/, /bi/, /bu/, /be/, /bo/)の音が言葉の中間に出現する場合、原則的に無声音のは行(/ha/, /hi/, /hu/, /he/, /ho/)と表記を同じにして区別しない。例えば/habataku/⇒/hahataku/, /hibiki/⇒/hihiki/のように、連濁現象を利用して正しく読めることを利用した。

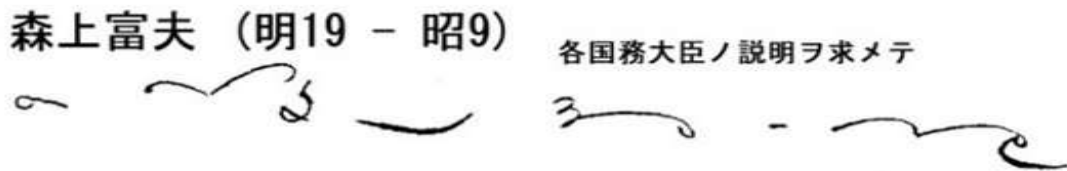


図 2-31 ガントレット式の符号文例 森上富夫による

ほかにも、拗長音の/chah/, /chuh/, /choh/, /jah/, /juh/, /joh/, /shah/, /shuh/, /shoh/における長音符を打たず、拗短音と区別しないこととした。

日本語では/sokki/, /tohha/, /icchi/などのように後続の子音を重ねて促音を表すが、促音便の例外となる/na/, /ha/, /ma/, /ya/, /ra/, /wa/の前に促音が出現しない現象も見出した。

ガントレット式は、規範符号を幾何図形に求めた補いとして筆記運動つまり画線の連続法の分析と人間工学的な対策をとった。

- 1) ピットマン式にならって、ある同じ音に対して順逆に書記方向が異なる2種類の速記符号を用意した。そうして前後の線とのつながり関係に鈍角と鋭角の選択肢がある場合、鋭角接続を優先（鋭角選用の規則）する。
- 2) 曲線を接続するとき、2種類の書き方がある場合、同じ方向に回転する組み合わせを良とする。例えば[ル], [ム]には書記方向が正反対のものがあるが、同じ回転方向を採る。その理由は、前進（順流）方向は後退（逆流）方向よりも速く書けるものである。

ガントレットは「日本語速記術」（3巻）を著す際、日本語速記法を創案するに当たって、アイザック・ピットマンに表敬の書簡を送り、また田鎖式の促音法の優れた点を見て、その着想の利用の許しを田鎖綱紀や若林珅蔵、林茂淳に請うていた。

また、ガントレットは教職に就いていた学校で自式を余暇に指導した。ガントレット式

で成功した速記者として森上富夫があり、田鎖式が独占していた国会の速記者採用試験に最優秀の成績で合格、田鎖式以外で初めて衆議院速記者となった。また藤田直助<sup>#5</sup>は田鎖式から方式転換に成功し、普及活動を始めたが、25歳で夭折した。

基礎符号(1)	ア イ ウ エ オ	カ キ ク ケ コ	サ シ ス セ ソ
E.Gauntlett 1899	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	) ) ) ) )
熊崎健一郎 1903	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ
武田千代三郎 1905	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	) ) ) ) )
中根正親 1914	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ
基礎符号(2)	タ チ ツ テ ト	ナ ニ ヌ ネ ノ	ハ ヒ フ ヘ ホ
E.Gauntlett 1899	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ
熊崎健一郎 1903	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ
武田千代三郎 1905	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ
中根正親 1914	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	) ) ) ) )
基礎符号(3)	マ ミ ム メ モ	ヤ ユ ヨ ラ リ	ル レ ロ ワ
E.Gauntlett 1899	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ
熊崎健一郎 1903	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ
武田千代三郎 1905	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ
中根正親 1914	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ	ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ

図2-32 ガントレット式、熊崎式、武田式、中根式の基礎符号表

ガントレット式は広く普及することはなかったが、その理論は折衷派の熊崎式に影響を与え、のちの早稲田式へもつながる方式であった。また、ガントレットは、ピットマンに日本語への翻案の経緯を報告しており、ピットマンはガントレットの業績を評価していた。そうした経過から、ピットマンは、ガントレット式の英文解説書「Japanese Phonography」を外国語速記法の種類として出版したが、これは海外で発行された日本語速記法の最初とされている。<sup>#5</sup>

また、衆議院に在籍した森上富夫は1934年、「ガントレット式日本語速記術」を出版した。森上の登場はガントレット式の評価を高めただけでなく、衆議院速記者養成所が発足したのちは、教授として招請されて、田鎖式・衆議院式の折衷化の研究に貢献した。ガントレッ

ト式は、田鎖系だけだった日本語速記界において、新たな世界を切り開いた。

### 3. 幻の単画派「武田式」の衝撃 ～官選知事の新規の方式提案～

日本語の音節文字は、実際の発音と異なる場合がある。しかし、音声言語を文字化するに当たっては、速記符号が文字に対応するものであれば十分機能する。

武田千代三郎は 1904 年 7 月、雑誌太陽に「速記術の実用」のテーマで論文を投稿した。その趣旨は、田鎖式を起源とする複画派、ガントレット式を起源とする折衷派の次に出現する速記の流派は単画派であると予言する論であった。<sup>#6</sup>

武田は前年、山口県の官選知事を退任して 1905 年の山梨県知事に就任するまでの間に、東京大学時代に学んだピットマン式を参考にして、一音節一画のストロークを配分する幾何派の基礎符号を考案した。その成果を同年 3 月 15 日（水）～4 月 22 日（土）の新聞「日本」紙上で、日本語で初めての単画派となる武田式速記法として公開した。

初の単画派、武田式における基礎符号の単画符号比率は 75% へ高まった。ただし日本語速記理論における単画の概念では、サイン（濃線、大円、小円、カクカギ、マルカギ、加点等）を画数計算に含んでいない。

武田は手書き版の「武田式全畫體速記法」（1905 年 5 月、B5 判 81 ページ）において「これは英国速記学界の泰斗たるアイザック・ピットマン郷の定めたものに基づいて作ったのである」と素性を書いた。そして図 2-32 に示すように、基礎符号を武田は、[K] を [カ]、[S] を [サ]、[SH] を [シ]、[T] を [タ]、[CH] を [チ]、[N] を [ナ]、[NG] を [ニ]、[F] を [ハ]、[M] を [マ]、[N]（下降）を [ヤ]、[R] を [ラ]、[W] を [ワ] としてピットマン式の基礎符号を自式の基礎符号に配当したとする。ここで一音節を一画の基礎符号で表すことができるようになり、複画符号で用いていた尾部の母音のサインを略字体文字と名づける縮記法に用いることにした。

彼はその後も神宮皇學館長、大阪市立高等商業学校長などの官職を重ねており、それ以上の速記研究、速記の普及に従事することはなかった。武田式速記法についての質問も「当時の研究者たりし衆議院速記技手、長谷川篤に委して応答せしむると云うような訳であって、何等発達の途が講じられなかった。（中略）故に現今に至るまで、武田式速記術を標榜して立って居る技術者は、当時同邸に寄宿して居って其教を受けた赤根谷友三郎唯一人あるのみである。」<sup>#5</sup> という状況であった。ほかに、菅原登は、中央大学事務局速記職員、佐藤久仁男が武田式速記法を学んだとするが、学習者は数人出たものの、実使用には至らなかった。武田式は、その後の日本語速記法の研究に大きな刺激を与えた。

#### 4. 田鎖式系統の成果を集約した熊崎式の登場と折衷派の展開

##### [熊崎式の登場]

大正時代初期の主な速記流派は、田鎖式、ガントレット式、武田式及び熊崎式の4種であると、熊崎健一郎（1881.5.5－1961.8.25）は「新式速記術独脩」（1914）の自序に書いた。

新版の新田鎖式を学んだ熊崎は新方式の立案に乗り出し、1906年「新式簡明速記学」を出版した。同書には「内外諸種の各式を参考して其長所を折衷し、之に自己創意の新案を加え、専ら記号の簡明と速記力の増大とに重きを置き理論に拘泥せず、実用を主として考案編成したものである」<sup>#7</sup>と、田鎖式、ガントレット式、武田式を土台にして組み立てたことを述べている。その動機は「顧みれば自己の技倆は遅々として未だ上達の域に達したりと云うを得ず拮据勉強夙夜怠らずと雖も意独り先んじて技之に伴わず予此時私かに惟らく之れ予が勉学の足らざるに非ずして速記術の不完全に因れるならんと」つまり速記法体系の完成度に疑問を持ったからである。

熊崎は、新式の特徴として(1)速記文字を大中小3個の円形より割り出したこと、(2)五十音の記号をおおむね単画若しくは単画に等しき曲直線を以て組織したること、(3)線の長短区別法によりて記号の簡捷を計りたること、(4)使用最も多きサ行、タ行に本変二様の書き方を設けたこと、(5)記号は悉く淡線のみなること、(6)縮綴法と称する6個の特殊記号を応用して文字の連綴を短縮し運筆の便を計りたること、(7)略字の使用数を極めて少数に減じ記憶応用に甚だ容易なること、(8)脱漏、(9)縮綴法応用の結果、1字にして2音に読み得られる複音記号の制を定めたること、(10)新たに省略法を設け、就中僅かに10個の特殊記号を用いて言語文章中の動詞其他を省略するの法を定めたこと等である一を挙げている。

図2-32に挙げた熊崎式の基礎符号は、ガントレット式の設計方針を取り入れて、次のような特徴を備えた。

- 1) 複画方式において1音節を示す「ストローク+サイン」で2音節をあらわすことを可能にした。(同画倍音) 熊崎式の単画線比率は47%に高まった。
- 2) 縮字規則を設けて筆記線量を減らし、略字依存を軽減した。(縮記法による全音記法)
- 3) カ行、サ行、タ行を含む言葉が日本語に多いので、サ行、タ行には順逆2方向で書く線を割り当てて、鋭角選用の規則により連綴しやすくした。(鈍角接続の排除) つまり、二線の接合に二様の接続型がある場合、鋭角で綴れるように、使用頻度の高いサ、タ行に始点A⇒終点B、始点B⇒終点Aのような順、逆の書き方を設けた。

熊崎は自式の優劣を試すため1906年、衆議院の採用試験を受けた。結果は、受験者28名中二位の成績で合格したが、国会速記者への進路をとらず、新聞社にとどまった。

熊崎は速記独習可能論を展開した。創案者自身が電話速記に従事していた関係もあり、熊崎式は電話速記者を必要とする新聞、通信社などに広がった。つれて、熊崎式を改良する研究者が続いた。こうして田鎖式から派生した複画派が民間において折衷派へと変化していった。

新聞社が生まれたばかりの速記を用いたのは、1883年7月9日、郵便報知新聞社が自由新聞社を相手に記事取り消し要求するために若林珣蔵を雇い、申し入れのやりとりを速記させて同月12日から16日の5日間に連載したのが始まりであった。

1890年12月、東京、横浜に電話が開通し、予約電話に続いて1899年に東京・大阪間の長距離電話が開通してから記事原稿を電話で読み上げて送稿する手法が一気に普及する。明治憲法の記事送稿時は東京－大阪間の長距離電話が利用できず、電信による送稿法をとったのと比べ、画期的な技術革新であった。

基礎符号(1)	アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ
熊崎健一郎 1903	~ > 丿 丶 丶	— ㄣ — —	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ
安田勝蔵*1 同盟通信 1938.9.9	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ	— — — —	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ
松崎平策*2 大阪毎日新聞 1943.7.1	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ	— — — —	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ
基礎符号(2)	タチツテト	ナニヌネノ	ハヒフヘホ
熊崎健一郎 1903	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ
安田勝蔵 同盟通信 1938.9.9	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ
松崎平策 大阪毎日新聞 1943.7.1	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ
基礎符号(3)	マ ミ ム メ モ	ヤ ユ ヨ	ラ リ ル レ ロ ワ
熊崎健一郎	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ
同盟講習所	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ
松崎平策 大阪毎日新聞	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ ㄣ	ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ

図 2-33 電話速記に用いられた複折 3 速記方式

図 2-33 に電話速記の複折 3 方式の基礎符号を挙げた。商業新聞にとって、速報のため記事の高速送信、大量処理は競争力の原点であった。そうしたニーズに応じて、田鎖系の速記者が新聞報道市場へ流れた。一方、速記研究者の中では記事受信に適した研究が行われ、田鎖式系佃式の松崎平策はのちに大毎式となる複画式の松崎式を世に送り出していた。さらに青木茂朔は松崎式から大毎式へと改良を進めて、1943年大阪毎日新聞社は社内養成を始めた。そのほか、取材拠点、取材記者をふやして大新聞が速報競争への時代へ進むと、電話速記者不足が深刻になり、朝日新聞でも社内養成に乗り出した。もっぱら新聞社へ記事を配信する通信社界でも、同盟通信社が安田勝蔵の田鎖系の同盟式で養成訓練に乗り出すなど、折衷、複画派は太平洋戦争末期にあつて盛んに電話速記者を育てた。単画派の中根式、国字式等でも電話速記者の供給に力を注ぎ、速記は黄金時代にあつた。

話されるとはいえ、書かれた記事を電話で受信する速記は、それまでの話し言葉体とは違って冗長度がない上、固有名詞、同音語、類音語があつて難しさが加わつた。電話速記ではミスゼロが要求され、また直ちに反訳することが求められた。それは速記者に政治、宗

教, 流行, ファッション, 野球, 文化など全紙面の記事に用いられるであろう豊富な, 専門的な言葉を知っている能力が求められたことでもある。

電話速記では頭にヘッドホンを装着する場合もあるが, 左手で受話器を保持し, 右手で鉛筆を持ちながら右手で速記用紙をめくるような作業現場もあった。そのような速記では, 句読点, 改行などの筆記が必要で, 速度よりも, 正確に書けて, 完全に読み返せる符号を筆記することが重要であった。狭き門の議会に入れなかった速記者, 学習を終えたばかりの速記者が需要を拡大する民間の電話速記に, 議会を上回る好待遇で招聘される時代があった。また, 地方にも速記の職場が生まれた。1953年11月3日には日本速記協会の速記技能検定試験で新聞級(2,300字/10分朗読)が設けられて, 新聞記事を書き取る技能を評価することになった。

送り手と受け手の協力が電話速記の要であり, 朝日新聞大阪本社では1961年7月, 通信部, 連絡部が協力して「電話の読み方送りかた」教本を作成し, 速記利用のレベルアップを目指した。当時, 同社は東京, 名古屋, 大阪, 西部の4本社制で, 大阪本社管内では地方部38版, 通信部34版の版があり, 11支局から電話送稿が一日3,000行(1行は15字)ないし4,000行, ほかに書き原稿5,000行があった。教本の“はじめに”には, 「送稿については, まず受ける速記者が十分に訓練され, ニュース・センスを身につける必要があります。そして, 記者諸君の取材の労苦, 記者のカンどころが打てば響くようにピンと来るのでなければなりません」とし, 「一方, 送りの側にも希望したい点があります」と前置きして「最もご理解いただきたいのは, 速記をしながら意味が頭に入らないと翻訳できないという点です。どんな有能な速記者でも例外はありません。つまり, 送稿にさいして『この読み方で速記者にのみこめるだろうか。この個所は原稿の字を見ないものに間違いなく書きとれるだろうか』という配慮をもちながら吹きこんでいただきたいわけです」と問題点を挙げている。

教本を発行した年の2月, 岡山で開いた通信会議で若手記者の要望を聞いてまとめたものだが, 速記者はニュース記事を速記したのち, 漢字電信機(漢テレ)をたたいて反訳文を直接送信テープにパンチを入れ, それを次工程に渡して植字の自動活字鑄造機(キャスト)で鉛活字を割り付け通りに鑄込んで, さらに製版へ回すという画期的な工程変更に新聞業界で初めて乗り出していた。のちに鉛活字を用いない電子写真製版へ進む第一歩に当たり, 手書き速記者はイノベーションの荒波に飲み込まれていく時代であった。

1964年の東京オリンピック時の朝日新聞の速記者の大量確保は電話速記の最後の花だったと言える。そうして日本語漢字テレタイプ技術や電話ファックスなどが普及すると, 1980年代には電話速記は次第に消えていった。



### 5. 牧の新熊崎式が離陸

田鎖式では速記は対面指導で養成されたのに対して、熊崎健一郎はみずから提唱した速記独習論を実証した。しかし、熊崎は創始した熊崎式姓名学（五聖閣）へ転身して速記界からの引退を表明し、独学者の熊崎式改良研究、普及活動を自由にした。著作権に縛られることなく、自由な方式改良や普及指導への動きを促進し、新方式を名乗る者が続いた。

	アイウエオ	カキクケ コ	サシスセ ソ
① 熊崎式 1906	㇀ ㇁ ㇂ ㇃ ㇄	㇅ ㇆ ㇇ ㇈	㇉ ㇊ ㇋ ㇌
② 新熊崎式 1924 図37	㇀ ㇁ ㇂ ㇃ ㇄	㇅ ㇆ ㇇ ㇈	㇉ ㇊ ㇋ ㇌
③ 超熊崎式 1934 版	㇀ ㇁ ㇂ ㇃ ㇄	㇅ ㇆ ㇇ ㇈	㇉ ㇊ ㇋ ㇌
④ 超熊崎式 1934 図43	㇀ ㇁ ㇂ ㇃ ㇄	㇅ ㇆ ㇇ ㇈	㇉ ㇊ ㇋ ㇌
⑤ 新牧式 1961	㇀ ㇁ ㇂ ㇃ ㇄	㇅ ㇆ ㇇ ㇈	㇉ ㇊ ㇋ ㇌

	タチツテト	ナニヌネ ノ	ハヒフヘホ
①	㇍ ㇎ ㇏ ㇐ ㇑	㇒ ㇓ ㇔ ㇕	㇖ ㇗ ㇘ ㇙ ㇚
②	㇍ ㇎ ㇏ ㇐ ㇑	㇒ ㇓ ㇔ ㇕	㇖ ㇗ ㇘ ㇙ ㇚
③ 1933	㇍ ㇎ ㇏ ㇐ ㇑	㇒ ㇓ ㇔ ㇕	㇖ ㇗ ㇘ ㇙ ㇚
④ 1934	㇍ ㇎ ㇏ ㇐ ㇑	㇒ ㇓ ㇔ ㇕	㇖ ㇗ ㇘ ㇙ ㇚
⑤	㇍ ㇎ ㇏ ㇐ ㇑	㇒ ㇓ ㇔ ㇕	㇖ ㇗ ㇘ ㇙ ㇚

	マミム メ モ	ヤユヨ	ラリル レ ロ	ワ
①	㇛ ㇜ ㇝ ㇞ ㇟	㇠ ㇡ ㇢	㇣ ㇤ ㇥ ㇦	㇧
②	㇛ ㇜ ㇝ ㇞ ㇟	㇠ ㇡ ㇢	㇣ ㇤ ㇥ ㇦	㇧
③ 1933	㇛ ㇜ ㇝ ㇞ ㇟	㇠ ㇡ ㇢	㇣ ㇤ ㇥ ㇦	㇧
④ 1934	㇛ ㇜ ㇝ ㇞ ㇟	㇠ ㇡ ㇢	㇣ ㇤ ㇥ ㇦	㇧
⑤	㇛ ㇜ ㇝ ㇞ ㇟	㇠ ㇡ ㇢	㇣ ㇤ ㇥ ㇦	㇧

図2-34 牧泰之輔の改良符号の変遷 兼子次生作成  
(熊崎式 ⇒ 新熊崎式 ⇒ 超熊崎式 ⇒ 牧式 ⇒ 新牧式)

牧泰之輔は独習した熊崎式の技能を活かしてフリー速記者として関西で実務に就きながら速記教育を行う一方、濁音符號の新設や高速度理論の研究に力を注いだ。牧は基礎を熊

崎式に置いたが、超中根式の森卓明を通じて中根正親の逆記法理論を取り入れたり、中根式や毛利式からラ行音の下段略記法等を導入した。初めに新熊崎式と称したが、森沢神行が新熊崎式と命名していたため、森にならって「超」を冠して超熊崎式と呼んだりしながら、最終的には牧式、新牧式に改称した。

牧式は基礎符号の特徴として、

- 1) 濁音 [ジ], [ゼ], [ゾ], [ド], [ジョ], 鼻音等の専用文字をつくり, 濁点を要せず, 濃線化しないで濁音や長音をあらわせる,
- 2) カ行, サ行, タ行に最も書きやすい線を配分した,
- 3) 英語も容易に速記できる和英共用方式, ——などを挙げた。

超熊崎式の改良では, 複画符号の [ク] を廃止して点画の方法に絞り, 新たに [フ] を単画とし, 複画の [ヌ], [ム], [ユ], [ル] はそれぞれのア列の符号に加点する方法とし, その加点は略してもよいとしたため, 五十音表にはイ列とエ列だけが小円つきの複画符号として残った。

図 2-35 に, 基礎音節に対応する符号の変更年と符号を挙げた。西暦年は符号を変更した年とその符号を示し, 左から右へ改良の足跡を示している。牧は 1923 年に初版を公表し, 翌年新熊崎式, 1927 年, 1944 年に超熊崎式改訂版, 別名牧式, 新牧式の名称で改良版をガリ版刷りで発行し, 西日本で普及活動に力を注いだ。

新牧式の符号研究の特徴について牧は 10 点を挙げている。①符号を下段に書いて [ン], [キ], [カイ] を略す, ②五十音基礎符号のほかに, [鼻音], [濁音], [イ], [ツ], [リ], [ク] 等を設けた, ③五十音基礎符号を名詞用, 動詞用の 2 種類とした, ④下降符号と別に上昇符号を設けた, ⑤前の符号を利用して後の符号を簡単にした (前符号の下から次の符号を書けば [ニ], [リ] を省く。[に対し], [に関し], [売上げ], [やりくり] 等に適用), 先行符号に後続符号を交差して [セー], または [ショー] を示す (「精神」, 「生活」, 「情勢」等), ⑥連続上都合のよい反対線 (逆字) を用いる (「青少年」 → [青少メン] と符号を書くなど), ⑦離筆をなるべく避ける, ⑧逆モーションをなるべく避ける, ⑨符号を下段に

	1923	1924	1927	1944
ア	ゝ へ			ゝ
ウ	ゝ ー	ゝ	ゝ ー	
エ	ゝ へ	へ		へ
ク	ゝ へ	へ	へ	
チ	ゝ		ゝ	ゝ
テ	ゝ		ゝ	ゝ
ヌ	ゝ	ゝ	ゝ	
フ	ゝ	ゝ	ゝ	
ム	ゝ	ゝ	ゝ	
ユ	ゝ	ゝ	ゝ	
ル	ゝ	ゝ	ゝ	

図 2-35 牧泰之輔の熊崎式改良の経過

書いて[ク], [キ]がつくこととする, ⑩上段に符号を書いて長音とする, ⑪濃線を廃止し, 淡線だけとする——とした。

高速度化の成果では, 石河勝彦 (鳥取県会) が 1956 年 5 月 5 日の第 2 回関西速記技術最高競技会 (朗読速度 10 分間 3, 575 字) においてミス 54 点で入賞して牧式の評価を高めた。牧は, 合理性の観点から縦書き原稿の書字方向で左起右進縦書きを提唱したことがある。

一方, 熊崎式速記法の教育面では, 太平洋戦争後の 1948 年 12 月, 神戸市において大西田鶴子が神戸速記学校を設けて熊崎式の指導を開始した。大西のあとを受けて, 門弟の藤岡宏彰は 1962 年に「熊崎式改良法」(1-6 巻) を総合速記研究会から発行し, 1972 年 2 月 11 日に株式会社神戸総合速記を設立したあと, 同年 5 月に神戸総合速記学校を開校して熊崎式に早稲田式の一部を加えた熊崎式改良式の指導を開始した。しかし, 事情もあり, 藤岡は速記人材充足が進んできたことなどから, 2013 年に同校を閉校した。

## 6. 学生速記と早稲田式の誕生

学校教育における課外活動としての速記研究会は, 日本速記年表によれば, 1893 年 (明治 26 年) 2 月に慶應義塾商業学校の生徒有志が速記術研究会を結成し, 森本大八郎に教授を委嘱した記録が最も古い。戦前の旧制学校における部活は 1931 年 2 月, 福岡商業学校において中根正世 (正雄) が行った講演会から始まり, 大学における部活はやはり 1931 年に大学公認となった早稲田大学速記研究会が今日に至っている。国立大学における部活は 1938 年, 九州帝国大学で豊島延治が大学公認で創部した速記部 (会長平山一雄教授) が始まりで, 1958 年 4 月には岡山大学速記部が結成されてカナ速記の相賀式が採用され, 大阪大学で中村元保が学生時代に中根式の速記部を創部, 中根正親の母校, 京都大学では 1996 年下谷政弘教授が中根式の速記部を創部した。正課の速記は 1889 年, 私立東京商業学校と, 高等商学校 (一ツ橋高商の前身) に始まる。

太平洋戦争後, アメリカ式教育を採り入れて, 高等学校の学習指導要領に「速記」が加えられて「速記」(1960 年発行, 川口晃玉, 言潮社) が文部省検定を受け, 「中根式速記」(1968 年発行, 森下等ら, 実教出版販売扱い) が制作された。また, 1962 年度からは中学校の指導要領が変わり, 選択科目「商業」の中に「速記」が加えられた。武部によると, 商業の教科書の 4~7 ページが割かれる形で, ①「中学商業」(中根式, 大原出版), ②「中学商業」(中根式, 開隆堂出版), ③「最新中学生の商業」(衆議院式, 暁出版), ④「中学商業」(衆議院式, 実業之日本社), ⑤「中学校新しい商業」(早稲田式, 一橋出版), ⑥「中学商業」(中根式, 三省堂), ⑦「標準中学商業」(中根式, 教育出版), ⑧「実教中学商業」(荒浪式, 実教出版), ⑨「標準中学の商業」(早稲田式, 講談社) が検定済みとなっていた。武部は, 「高等学校学習指導要領に「速記」が加えられてかれこれ 15 年にといいうのに, いまだに文部省検定済みの教科書が出ていない」とし, 高校の「速記」教科書と連携させることが課題だと述べた。しかし, 武部の夢は実現しないまま, 21 世紀に入って

専修学校における速記教育は終了し、また国立3速記者養成機関は2006年末までにすべて廃止された。

こうして速記の普及活動は、職業としての速記から、教養リテラシーや競技速記へ関心が広がってきた。そのほか、太平洋戦争末期から手書き速記に加えて機械速記や、その延長から電子機械速記、21世紀には自動音声認識（ASR）が実用され、科学技術の進歩による新しい機能が加わって、速記のパラダイムが大きく変化しつつある。

高校、大学とも速記の部活は太平洋戦争後の昭和中期に最盛期となったが、平成、令和に至って低調期にある。大学の部活速記は最盛期に全国に20数大学を数えたが、国語速記発表140年を迎えた2022年現在、福岡大学、関西大学、関西学院大学、岡山大学、早稲田大学の5大学が活動する状態となっている。

民間方式の中根式と早稲田式は学生速記ベンチャーの所産であった。学生が考案した速記方式を普及する先行事例としては、1914年第三高等学校在学中の中根正親が研究し京都帝国大学に入学後、公にされた中根式があるが、早稲田大学速記研究会においても第一期単画早稲田式にかわって1930年に始まった第二期折衷早稲田式が成長していった。その後、早稲田式は川口渉の努力によって社会教育、専門学校教育面で発展したが、まず早大速研における早稲田式創案の歴史を諸記録に基づいて考えたい。

早大速研の歴史は川口抜きに考えられない。川口は1906年、広島県賀茂郡三津口村で鉄蔵、ノブの第四子として生を受けた。事情があって川口は1921年秋、逓信省広島通信講習所へ入所し、翌年卒業して社会人となった。その間、速記に興味を抱いて1924年、田鎖式系荒浪式の独習を始めたが、正規の学校への進学を目指して1925年には広島広陵中学校に中途編入、翌年修了した。荒浪式の練習を続けながら進学への夢を描き、1928年旧制早稲田大学附属第一高等学校政治経済学科に入学した。第一高校時代に一年上級の大嶋武士（昭8法、茸次とも。のちに畑中と改姓）の呼びかけに応じて集まった仲間が速記諸式の長をとり早稲田式速記法を開発する活動が始まった。仲間は、野村（荒浪式、2,600字程度/10分間）、高木（中根速記学校卒、2,200～2,600字/同）といった顔ぶれで、大嶋のリードで研究を進めた。川口はよく書けるレベルにあり、個人的に1930年には折衷式案を立案していた。事情があり川口は一高を一年間休学、その間の練習で川口はさらに課外授業の講義録をとれるほどの技量に達したと伝えられる。

田鎖が初めて速記を講習した1882年から半世紀たって、速記研究会が1931年3月20日に大学公認となった。リーダー大嶋の単画早稲田式開発は、会員の合意を受けて進められた。大学法学部英法科に入学した川口は速研の幹事に就任し、単画式の研究に力を注いだ。

大嶋は速記界に積極的に働きかけ、田鎖式本家二代目、田鎖一が応援する態勢を整えた。期待の一期単画符号で練習を続けてようやく速記が書けるようになったころ、単画符号は壁にぶつかった。速記符号が完全に読めない。反訳に10倍、20倍の時間がかかり、30倍かけてもわからない符号が残る。当時、会議の発言速度は年々速くなっており、国会でも複画は時代遅れだと言われ始めており、後戻りできないところに追い込まれた。

大嶋が卒業すると、幹事長に就いていた川口は単画式断念を提案し、荒浪式の経験をもとに個人的に研究してきた折衷式案への転換を会員に諮った。二期折衷早稲田式の立案に挑戦するものであった。学生らしく自由な雰囲気のもとで活動が進んで、川口は実務経験を活かしながら先進諸方式の成果を集約した折衷派の早稲田式完成に打ち込んだ。

当時、日本の速記界は、主流が複画田鎖式系や折衷熊崎式であり、新進気鋭の単画中根式、さらにはドイツ草書派系の毛利式や仮名文字式といった理論が出現して大衆化が進んで、黄金時代を迎えようとしていた。

複画派は基礎符号の構成を子音画線+母音サインでつくり出す体系をとり、1音節を表記するために1画半程度の筆記負担であった。それに比して、単画派は1音節を1画線で筆記できて半画程度書字負担が少なくなり、その分高速度の発言を迫うことができると期待された。一方、折衷派は五十音表のア列とオ列が1本の線を配分され、複画と単画の中間程度の筆画数が期待でき、書きやすさ、反訳面で完成度が高い流派だった。

公認時の早大速研は会長を教授稲毛金七とし、大嶋は幹事長、川口が幹事であったが入学したばかりながら右腕を務める力量を備えていた。速研公認を祝う講演会では、日本速記学堂長の田鎖一が「速記の社会性」、創立者の大嶋が校友として「早稲田速記学及使命」と題する講演を行った。

田鎖家には、当時の折衷派「早稲田式速記学」の謄写版刷り教本と活版刷りの単画派「早稲田式初歩の速記学」が伝わっていた。単画から折衷へのバトンタッチを示す証拠とも言える資料であろう。武部良明の「1924年ごろより既成方式の研究を始め、1928年一度試案を完成したが満足せず、さらに研究を続けた」とする展開が進んで、川口の研究が実ることになる。

やがて川口は卒業、その後早稲田式速記普及会を設けて、符号研究だけでなく、指導法、教材、通信、全国展開の組織的な態勢が整えられ、速記の社会教育体制が確立されて今日に至った。

早稲田式成立過程の記録には日本速記年表（日本速記協会）、早稲田大学百年史、早稲田速記五十年史、川口学園80年のあゆみ、早稲田式速記普及会愛媛支部編「早稲田式速記創始苦心談」などがある。

第一期の単画式案はおおむね(1)濁音は清音符号を濃線化する、(2)長音は濃線化または2ミリ長く書く、(3) [ン] は小円を順記（発音順で筆記）する、(4) [イ] は小円を逆記（中根式の用語でイ音を一音前に繰り上げて書き、反訳の際に元の位置に繰り下げて読むことを言う）する、(5)助詞は基礎符号を最短線化して筆記する——ことになっていた。

同じ画線を用いる基礎符号の一致度を比較すると、中根式と早稲田式単画符号では8符号（[カ]、[キ]、[コ]、[ナ]、[ニ]、[マ]、[ミ]、[モ]）が一致し、同一符号率が18%であるのに比して、熊崎式と早稲田式折衷符号との間では36符号（除 [イ]、[ク]、[ス]、[ツ]、[ヌ]、[フ]、[ム]、[ル]）が同一で、近似率は81.8%であった。

ゆえに早稲田式単画符号が中根式を手本にして創案したとの評は当たらない。

早稲田式	アイエオ カキク ケ コ サシス セ ソ タチ ツ テ ト ナ ニ ヌ
① 単画符号	㇀ ㇁ ㇂ ㇃ ㇄ ㇅ ㇆ ㇇ ㇈ ㇉ ㇊ ㇋ ㇌ ㇍ ㇎ ㇏ ㇐ ㇑ ㇒ ㇓ ㇔ ㇕ ㇖ ㇗ ㇘ ㇙ ㇚ ㇛ ㇜ ㇝ ㇞ ㇟ ㇠ ㇡ ㇢ ㇣ ㇤ ㇥ ㇦ ㇧ ㇨ ㇩ ㇪ ㇫ ㇬ ㇭ ㇮ ㇯ ㇰ ㇱ ㇲ ㇳ ㇴ ㇵ ㇶ ㇷ ㇸ ㇹ ㇺ ㇻ ㇼ ㇽ ㇾ ㇿ
② 折衷符号	㇀ ㇁ ㇂ ㇃ ㇄ ㇅ ㇆ ㇇ ㇈ ㇉ ㇊ ㇋ ㇌ ㇍ ㇎ ㇏ ㇐ ㇑ ㇒ ㇓ ㇔ ㇕ ㇖ ㇗ ㇘ ㇙ ㇚ ㇛ ㇜ ㇝ ㇞ ㇟ ㇠ ㇡ ㇢ ㇣ ㇤ ㇥ ㇦ ㇧ ㇨ ㇩ ㇪ ㇫ ㇬ ㇭ ㇮ ㇯ ㇰ ㇱ ㇲ ㇳ ㇴ ㇵ ㇶ ㇷ ㇸ ㇹ ㇺ ㇻ ㇼ ㇽ ㇾ ㇿ
	ネ ノ ハ ヒ フ ヘ ホ マ ミ ム メ モ ヤ ユ ヨ ラ リ ル レ ロ ワ
①	㇀ ㇁ ㇂ ㇃ ㇄ ㇅ ㇆ ㇇ ㇈ ㇉ ㇊ ㇋ ㇌ ㇍ ㇎ ㇏ ㇐ ㇑ ㇒ ㇓ ㇔ ㇕ ㇖ ㇗ ㇘ ㇙ ㇚ ㇛ ㇜ ㇝ ㇞ ㇟ ㇠ ㇡ ㇢ ㇣ ㇤ ㇥ ㇦ ㇧ ㇨ ㇩ ㇪ ㇫ ㇬ ㇭ ㇮ ㇯ ㇰ ㇱ ㇲ ㇳ ㇴ ㇵ ㇶ ㇷ ㇸ ㇹ ㇺ ㇻ ㇼ ㇽ ㇾ ㇿ
②	㇀ ㇁ ㇂ ㇃ ㇄ ㇅ ㇆ ㇇ ㇈ ㇉ ㇊ ㇋ ㇌ ㇍ ㇎ ㇏ ㇐ ㇑ ㇒ ㇓ ㇔ ㇕ ㇖ ㇗ ㇘ ㇙ ㇚ ㇛ ㇜ ㇝ ㇞ ㇟ ㇠ ㇡ ㇢ ㇣ ㇤ ㇥ ㇦ ㇧ ㇨ ㇩ ㇪ ㇫ ㇬ ㇭ ㇮ ㇯ ㇰ ㇱ ㇲ ㇳ ㇴ ㇵ ㇶ ㇷ ㇸ ㇹ ㇺ ㇻ ㇼ ㇽ ㇾ ㇿ

図2-36 早稲田大学速記研究会の第一期単画符号と第二期折衷符号 兼子次生作成

早大速研の活動は (1) 「速記とは発言を正確超速度に筆記する法則を定めたる学なり」と定義し, (2) 早稲田式音標文字兼一言一字一劃の速記文字の民衆化, (3) 日本速記界の統一, (4) 速記報国, (5) 10分間の速度3,500文字以上 (『早稲田学報』1933年2月発行第456号38ページ) の5カ条が掲げられた。

今日につながる「早稲田式速記学」(以下初版と呼ぶ)には折衷派の基礎符号を掲載している。その初版と,1942年版武部良明著「日本速記方式発達史」と1963年版「早稲田速記研究・研究編」の基礎符号とを比較すると,[ス]は初版[㇄],発達史[㇄],研究編[㇄]で,[ツ]は初版[㇉],発達史[㇉],研究編[㇉]で違いがあり,揺らぎながら決まっていたことがわかる。

初版の目次を見ると,表音体系の説明に続いて,同行省略,W式イクツ省略法,同二段使用法,同レ,ネの三法,同特殊上段使用法,同特殊下段使用法,特殊省略法(成語・熟語),反語,重字法,成句省略法,特殊音標文字,数詞,助動詞が説明されている。

武部は「国語速記史大要(下)」に早稲田式の評価を次の9点にまとめている。

- ① 丹羽式の行き方をとって五十音表ではウ列の独立楕円を大楕円にかえた,
- ② また濁音,撥音,促音等の諸表示法に若干の修正を加えた,
- ③ 漢字音の取扱いにおいて,中根式の行き方をとって逆記による[ク][ツ]を用い,
- ④ 並びに毛利式の行き方をとって五十音表にア列系のアイ列を附し,それに小円を順記しエイ列とした,
- ⑤ さらに複画派の行き方をとって高頻度の二音節から24種を特定二音文字とした,
- ⑥ 同行縮字法においては熊崎式の行き方を改良し,新たに次音が濁音及び長音の場合を示す母音符号を加えた,
- ⑦ 助詞においては,複画派の行き方をとって,単独系には点画化せず,単画派の行き方をとって符号助詞の一方を点画化した,

- ⑧ 音訓転記法には中根式と同じく上段を使用した。これを高頻度 30 数種に限定し、  
⑨ 助動詞、高頻度単語に対する略字等には複画派の長をとりその特定を惜しまなかった。

速研では早稲田式速記法を広く普及するために、夏季休暇中に大嶋、川口ら役員、会員が東北、北海道を訪れて各地で講演会や講習会を開いていた。

海外への普及についても、1938年には「支那における速記を研究して将来の日支提携の一助になさんとする趣旨のもとに」（『早稲田大学新聞』1938年6月29日号）上海へ会員の派遣が計画され、1939年7月に佃元治が訪中している。

丹羽式では、創案者の丹羽瀧男は父音に母音を組み合わせる複画派の場合、母音部分が乱れて、縦に書くべき直線符号が右に、左に変形し、ことに小さな円、楕円が似て反訳の際に読みにくくなるとして、新丹羽式に改訂する際に大小2種類の円を父音符号の上下、左右に結合することに変わっていた。単画早稲田式では反訳時の識別が課題であったため、折衷早稲田式では新丹羽式の行き方をとって速記符号が書きやすく、正しく読み分けられる点に力を入れた。この特徴点は草書派の毛利式においても強調された点で、のちの泉式や仮名速記においても、日本語の筆記運動の特性に基づく筆跡を用いる符号研究、運筆法として取り入れる流れとなった。こうして折衷早稲田式では、日本的な書字運動の特性に基づいた速記符号の筆法を追求する立場をとり、その後幾何派の符号へも動態符号として日本的な草書派思想を広めることになる。

田鎖式を究極の省略レベルに高めた衆議院式では速記符号を小型にすることが高速化の必須条件としたが、早稲田式は符号の運用を自然に、合理的に行う筆法によって、大型の符号で高速度発話を固定することを可能とした。

早稲田式 川口晃玉

政府としては昭和30年度において14億  
3,000万ドルの輸入を予定しております。

(1) 政府としては昭和30年度において14億3,000万ドルの輸入を予定しております。

県財政の赤字克服策を中心に、その他教育、町村合併などの諸問題について若干の質問を試みんとするものであります。

(2) 県財政の赤字克服策を中心に、その他教育、町村合併などの諸問題について若干の質問を試みんとするものであります。

今年度の補正予算で計上する計画は立っておると言っていたじゃないですか。

(3) 今年度の補正予算で計上する計画は立っておると言っていたじゃないですか。

電力事情が著しく悪化したので生産量が低下したということでありましょうけれども、それは一時的な現象に過ぎないと思います

(4) 電力事情が著しく悪化したので生産量が低下したということでありましょうけれども、それは一時的な現象に過ぎないと思います

知事が真に人件費の増大を懸念して善処しようとする熱情を持っておられるのなら直ちにその対策を示されたい。

(5) 知事が真に人件費の増大を懸念して善処しようとする熱情を持っておられるのなら直ちにその対策を示されたい。

図 2-37 早稲田式の速記文例

早稲田式では寺井美巳が「搬送線原理」において速記線、搬送線の性質、字頭の打ち込み、半音節の理などを分析して、書きやすく、読みやすい速記線の研究を進めた。「半音節の理」で搬送線は通信工学におけるキャリア波にちなんだ命名で、実線間の送り線を数学的に論じた。折衷派が目指した同画倍音を実現するための指標として、寺井はパラグラフ速記の発想の中で速記符号の画数を漢字、熟語、語彙、句を構成する音数の半分の画数で筆記で



きるなら発言速度に遅れないとした。彼の論によると、速記技術は(1)書く技術、(2)読む技術、(3)聞く技術から構成される。そして速記符号は速度に応じて変化し、弾力性と安全性を持つべきであるとして、記線短縮万能主義を批判した。

速記符号を書く行動は、三次元の軌跡を描いており、速記線には目に見えない搬送線と見える実線がある。全体として空中を移動する搬送線を含めたスムーズな筆運びを研究することが課題と見た。

その寺井の論によると、速記符号は半音節の理に基づいて書く必要があり、音節と文字数の比率は  $K=x/y=6188/4800$  として  $\approx 1.29$  に当たり、すなわち2音を1ストローク強で書くことを指標とすることが、その目標である。実践派の佐竹康平は、この目標を達成するため、二音文字の体系を整えて高速度理論を追求し、多くの優れた人材を育てた。

創案者の川口は、早稲田式速記法の立案の方針として、①一部職業人の武器とせず、大衆の速記とすること、②超速度の美術的流線型文字たらしめること、③反訳に容易ならしめるように記線量を適当にすること、④専門速記者としても十分に立つに足る諸原則を備えること、⑤広義の国語力を涵養する限り遠い将来まで、つまり根こそぎ日本語が改められない限り、十分なものであること——を挙げた。

立案の方針を具現化するために、研究は当時の優秀方式の採長補短と融合化に向けられた。基礎符号は熊崎式の現代版と評されたように田鎖式の系統を汲む折衷とした。

田鎖系有力方式における速記理論の整備の流れは、二音文字の追求であった。1963年発行、川口渉著「早稲田速記研究」研究編では、二音文字として[○ン構造]を9種、[○イ構造]を28種、[○ク構造]を22種、[○ツ構造]を15種、[○キ構造]を14種取り上げ、和語用に各行に分けて多くが特定符号として解説されている。また、主要方式にならって助詞、助動詞が設けられた。簡字いわゆる略語が多く加えられ、先行方式で経験的に得られた日本語の特性に応じて筆記するための速記理論がきめ細かく整えられていた。

一般に速記法の運用技能としては、まず発話速度に十分に対応できる必要があり、そのために基礎符号の筆記負担を軽減する「縮記法」、重要でない音を省いたり、意味を示す「略記法」、言葉を復元できる場合には大胆に省く「省記法」を整えて、高速性と判読性を高めている。そこで、早稲田式では、各種方式の長所にならない、独創性を加味して6原則を制定した。それらは①ラ行音省略法、②加点头音簡略法、③依意省略法、④特殊簡字及び省略文字、⑤自由な活用を許容する特殊各人簡略法、⑥外国語の書記法——である。

これらを教材におさめ、原理、規則の目的、内容が記述され、また略語辞書体系の辞書化によって通信教育や独習ができるように配慮し、速記線の筆記運動の科学的研究によって動態符号の標準化が図られて技術、技能両面の教育体系が完成されていった。

推進者の川口は卒業後、個人を対象に早稲田速記の普及活動に乗り出し、ピットマンのように通信教育を行い、あわせて全国にスクーリング体制を整えて普及事業を大成した。

英文速記と言えば世界に広く普及したピットマン式が有名であった。その成功神話の道を開いたのは、イギリスの郵便制度の開始だった。1837年ピットマン式を公表したアイザ

ック・ピットマンは、1940年に郵便制度が始まったとき、ペニー・プレート（図2-38）を制作し、郵便料金一ペニーで最新ピットマン式のすべてを学べるテキストを送るサービスを提供した。イギリスでは世界各地と貿易が急発展し、ビジネスレターを口述作成する速記秘書が出現する時代にあり、ピットマン式を学ぶ人が急増した。

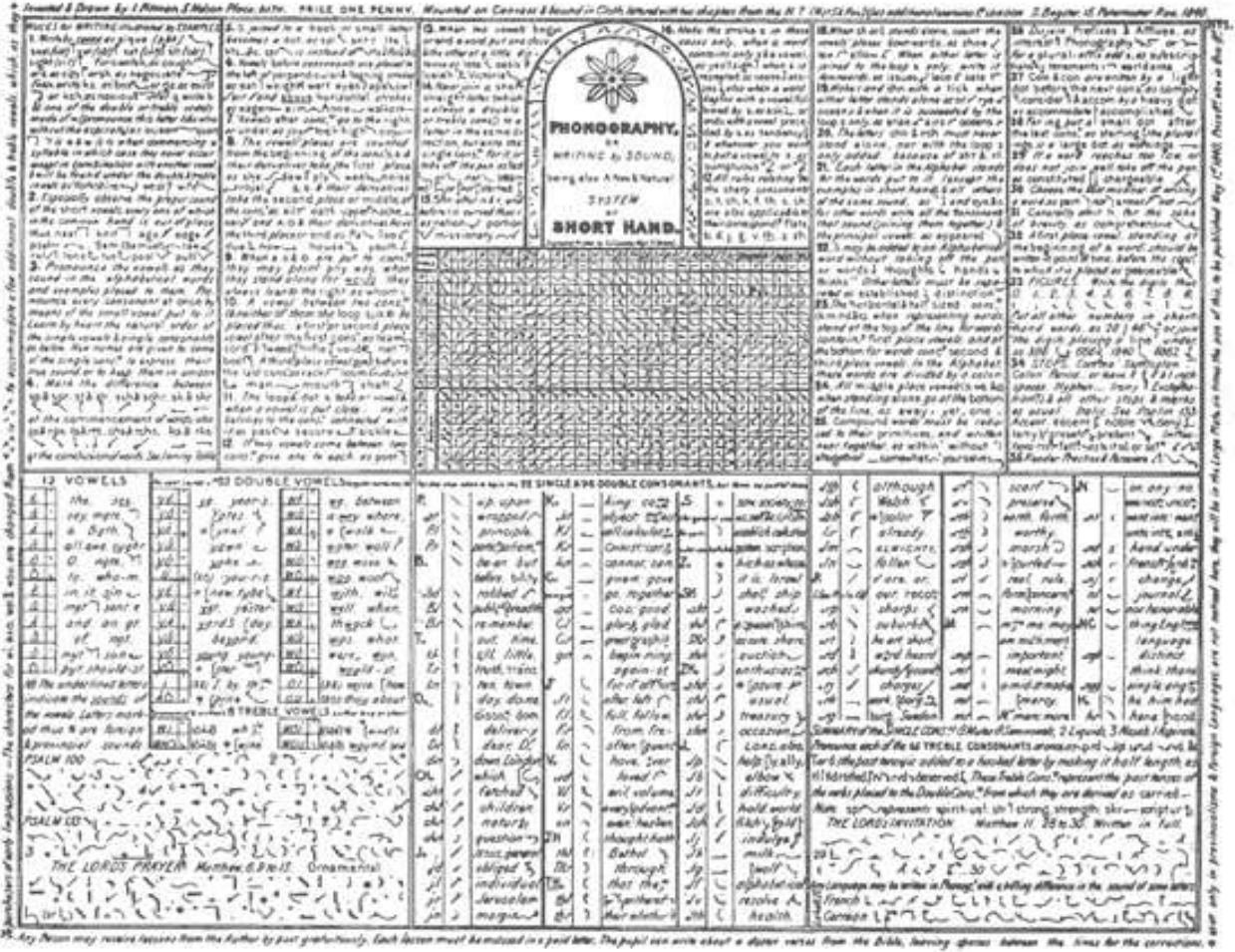


図2-38 速記の最初の通信教育 ピットマン式のペニー・プレート

日本では佃式の影響を受けて、安田勝蔵が速記独習論を厳しく批判する環境だったが、さきに熊崎の速記独習可能説が実証されており、川口が考えた通信教育という新しい速記学習の門を開いていた。川口は通信教育のための豊富な教材開発、速記略語字典、練習教材を整備した。併せて多くの研究者、指導者を育て、とりわけ速記符号の綴り方研究（寺井美巳）、高速度符号研究（佐竹康平）が進んでいった。その後も、手書き速記を電子速記へ移植する研究（柴田邦博）が行われるなど、速記方法の多様化を図るなど、日本で最大の速記者数を擁する方式へと発展したことは評価される。

ただ、手書き速記のゴールは、どんなに速く話されても完全に言葉として固定できる技倆であり、書いた速記符号が正しく、確実に反訳できることに尽きる。そのようなレベルに

達するのは、すべての学習者ではない。高速度理論を追った佐竹式の基礎符号表を見ると、

[ス] を早稲田式の [ㄥ] から [ㄥ] , また [セ] を同 [ノ] から [v] , [フ] を同 [ㄣ] から [一] へ変更するとともに、図 2-39 のようにタ行とサ行の角度を寝かせた。

	サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	テ	ト	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
早稲田式														
佐竹式														

図 2-39 早稲田式と佐竹式の主要符号の比較表 兼子次生作成

佐竹は、研究の動機が「そもそも音速に伴わぬ字画に悩まされたところにあるので、音速と字画との調整のため音速につり合わぬ画の多い単語を片っぱしから集め、これを検討した。音速と字画との問題で学んだことは、一単語中に円が 2 つ以上あるもの、くびれが 2 つ以上あるものはほとんど音速に合わぬということ」だったとし、一般への普及を図るために「早稲田式を高速度も書けるように研究した」と説明する。

その理論は 1 音, 2 音以上を表す速記音字と単語, 文節, 連文節などを表す領域で構成し, 6, 7 万語の語彙を検討して正確性を持たせて高速度の符号筆記を期し得るようにした。佐竹は、早稲田式と比較すると「五十音はほとんど同じで、違いがあらわれるのは拗音以降。省略法は、相当高度な研究を行った」と述べている。

現実に日本語における速記理論の特徴はいろいろな流派があり、佐竹式速記理論編ジュニアにおいて、佐竹は「一つの方式の中でも皆が同じ字（符号）を使っているとは限らず、各人各様の癖がある」ことが問題になるとする。その解法は理論の高度化と符号の運用経験に基づく緩やかな標準化であった。

佐竹らは運筆法にも着目して「短線は普通の速さで書く、長線はサッと速く書く」と書線リズムを重視しながら、符号運用のイメージを標準化し、符号連綴の原則として(1)作角の筆法, (2)ゆりつぎの筆法, (3)平行の原則, (4)流す筆法, (5)癖の修正（直線をそらす、長さを加減する）——書法を指導し、動態符号レベルでの筆跡書体の標準化をはかった。これによって日本語的な手書き速記のカリグラフィを完成したと言える。

佐竹の速記歴を見ると、1937 年第三回卒業証書授与式で卒業を認められ、翌年 10 月 10 日、衆議院で行われた第三回速記技術認定試験に早稲田式で初めて合格した。その後、長年、速記教育に携わるとともに、速記実務に従事しながら、高速度理論を完成していった。例えば類音語、同音語の処理などにおいて、田鎖式系に蓄積されてきた日本語研究の経験

知を参考にしながら取り組んだ。

平易な速記理論をとるか、高速度の専門速記者のための理論を極めるかで悩んだが、高度化をとる佐竹は川口渉と話し合って1956年1月独立し、佐竹式を名乗った。とりわけ佐竹は二音字の整理充実と易誤文字の改良研究に膨大な研究を行い、その成果として高速度速記に適応する符号体系の確立を果たした。

その中で普通二音字は字音語、和語、外来語など発言される言葉の中で頻度の高い2音列を取り出したもので、撥音、ク音、ツ音、キ音、ラ行、同行の二音字が125例挙げられた。また、工作二音字を使用範囲が狭く、適用が限定的なものと定義し、佐竹式速記学習コース1には二音字のうち工作二音字の生成原理として別行同列省略法、クキツチ省略法、加點使用法応用、基本代使応用、整線法、純粹二音文字が説明されている。佐竹は「工作二音字は、各省略法を拡張応用したり、似た音の音字を使ったり、形を変えたりして構成する二音字である」と定義した。

「簡字」(略語)の構成においては、上段法、略記法、特殊上下段、字上字下法、純粹簡字と応能省略法が重語と反語、成語成句、臨時多発語の見出しで説明した。そこでは音を前提にした速記符号の生成法、速記符号の形状に基づく書き方(線表象法)が示されている。

門下の橘孝幸は1982年7月24日、膨大な二音字整理ノートをもとめたが、そこで1958年版学習コースと1980年版簡字字典の用例を比較して(1)ク音、ツ音各省略法、変則音字、特殊音、(2)同行省略法・略語音字、特殊音字(3)ラ行省略法、特殊音字、(4)工作法、イ音字工作二音字について論じていた。

一方、易誤文字について、橘は1984年3月8日、易誤文字整理ノート初編をもとめた中で、「相互に誤りやすい速記文字である」と定義して、音声を聞いてから反訳までの間にミスが出る主因として(1)聞き間違い、(2)書き間違い、(3)速記文字の読み間違い(①ケアレミス、②速字自体に紛れの要素があるとき)、(4)反訳時の間違い(①漢字を知らない、うろ覚え、②思い込み、うっかり)の4類型があるとし、「吉川欽二が約1,000組の易誤文字を整理し、その結果をもとに/シン/と/ジン/、/セン/と/ゼン/などの速記符号を別字に変更した」と書いており、橘自身でも350組の易誤文字を確認している。

佐竹理論の研究は既存理論の整理拡張と新秩序の発見の歴史であった。佐竹はのちに早稲田式に復帰したが、晩年は再び佐竹式に戻った。佐竹式は中央大学速記研究会が採用し、吉川はかつてその一員であった。橘の佐竹観は「佐竹式は幾つかの改良の余地を残しているものの、早稲田式を根本から組み立て直した専門家の方式である。この点は、吉川が佐竹速記塾の塾報で非常に詳細、適切に分析している」であった。

## 7. 熊崎式から派生した米田式が続く

熊崎式系では、米田好兼(1912-1981.11.5)が太平洋戦争後に沖縄戦線から復員して、京都で米田式を発表し、その後大阪に本拠を移して方式改良と後進の育成につとめた。米田

は最初、桜井郷三著「最新応用速記術」1922.8.4で熊崎式を独習し、それに改良を加えて1941年「日本語速記術新講」を著した。その基礎符号は[ル]=[ㄥ]を除いて熊崎式のものであった。さらに1949年には、「熊崎式発展日本語速記法」において大胆に改良した基礎符号を公表した。

	アイウエオ	カキクケ	コ	サシス	セソ
1949年版	ㄥ)   ー、ノ	— — — — —		ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ
1950年版	ㄥ)   ー、ノ	〇 〇 〇 〇 〇	〇 〇 〇 〇 〇	)   ー、ノ	)   ー、ノ
1952年版	ㄥ)   ー、ノ	— — — — —		ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ

	タチツ	テト	ナニヌ	ネ	ノ	ハヒフ	ヘホ
1949年版	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ
1950年版	/ ー   ー、ノ	/ ー   ー、ノ	/ ー   ー、ノ	/ ー   ー、ノ	/ ー   ー、ノ	/ ー   ー、ノ	/ ー   ー、ノ
1952年版	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ

	マ	ミム	メ	モ	ヤユヨ	ラリル	レロ	ワ
1949年版	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ
1950年版	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ
1952年版	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ	ㄥ)   ー、ノ

図 2-40 米田式初期の符号変遷表 (1949,1950,1952 版) 兼子次生作成

ご紹介いただきました豊田でございます。現在は京都市の中で水道局に働いておりますが、その中で

この問題の窓口となっております福祉課の方で課長をつとめておりました。まあ、きょうは皆さん、ご承知のとおり、なんかほかの宣伝カーが回っていたということですが、

建国の日、昔の紀元節にあたるわけです。私どもちょうど2600年の頃でございましたが、例の「金鶏輝く日本の

栄えある光、身に受けて」とその金鶏輝く日なんでございまして、最近、文部省などでも最近文部省などでも教科書編成などの作業を見ておりますと、

図 2-41 米田式の文例 山口庄治 「速記符号集」1993. 9. 1 #095

京都を中心に、森卓明らの速記理論研究が盛り上がる中で、米田式は1950年版の基礎符号において、田鎖系の強い影響を示しつつ、衆議院単画符号と約20符号で類似性を持ち、一方半草書派のグレッグ式や正円楕円幾何派の国字式の影響を受けて[ヌ],[ム],[モ],[ホ]に楕円曲線を適用していた。また、1957年の「最新米田式標準速記法」においても幾何派の正円ダイアグラムに加えて、半楕円符号を取り入れていた。米田は基礎符号の一部をよく変更しているが、図2-40では3つの版(1949版, 1950版, 1952版)を取り上げた。

あわせて米田は、グレッグ式との互換をねらい[サ]⇒[S],[カ]⇒[K],[コ]⇒[G],[ハ]⇒[F],[ホ]⇒[V],[ナ]⇒[N],[マ]⇒[M],[ラ]⇒[R],[ロ]⇒[L],[エ]⇒[H],[ケ]⇒[D],[ツ]⇒[J],[ヤ]⇒[X]などを設定して、みずからの改良符号を提案した。ただ、グレッグが避けた90度線、右下60(210)度線を米田は用いた。これらの活動には単画化と、有力な速記理論を積極的に取り入れる米田の姿勢があらわれている。

	ウ	ク	ス	タ	チ	テ	ト	ヌ	フ	ム
1952年版	<sup>or</sup> -	—	)	↙ <sup>or</sup> ↘	↙ <sup>or</sup> ↘	↙ <sup>or</sup> ↘	↙ <sup>or</sup> ↘	∪	∩	∩
1954年版		<sup>or</sup>						∪ <sup>or</sup> ∩		∩ <sup>or</sup> ∪
1960年版		—	) <sup>or</sup> )						( <sup>or</sup> (	
1972年版			)			↙		∪	∩	∩

図 2-42 米田式における基礎符号の改編歴 (各教本から抜粋)

兼子次生作成

一転して 1972 年、米田は「総合速記講座」を発表した。この版を厳密に見ればウ列の [ス], [ヌ], [フ], [ム], [ル] に小さな変更が見られるものの、1949 年の基礎符号にほぼ戻った感じで、熊崎式に回帰している。

米田式の文例は京都府舞鶴市議会の速記に従事した山口庄治による。

京都府立鴨沂高校時代に米田から学んだ門部卓志は、同志社大学へ進んで、米田を助けて速記講習会開催を実行し、その後の研究会の発足に関係した。卒業後は広告業界に入り、美空ひばりの蚊取り線香の商業「金鳥の夏、日本の夏」を制作するなど活躍した。

同大速研結成で主導的役割を担った東野裕一は 1958 年に学術団体公認を実現するなど、課外活動の体制整備に貢献した。ちなみに、当時、速記講習会を受講すれば教職課程の 2 単位を与え、速研の正式会員となるというものであった。また、同大速研は全日本学生速記連盟の原加盟校として早稲田大学等と中心的な役割を担い、その結成を実現した。

一般に、大学における学生速記では三年生が一年生を指導し、持ち上がりで四年生が二年生を指導するサイクルをとる。その後、教養課程の同志社田辺校地への移転が行われて、京都市内今出川校地にいる上級生の拠点と分離されたため、日常の練習の場で行われる技能伝承がうまくまわらなくなり、1990 年ごろ解散したと推定される。

米田式では、1955 年 5 月 3 日の第 2 回関西最高速記技術競技会で竹元健次（朝日新聞）が一席で入賞し、高速度型としての米田式の評価を高めた。若津博一は読売新聞で電話速記に従事、小淵一雄は日本速記協会の機関誌「日本の速記」編集長を務めた。

## 8. 日速研式とコクサイ式の登場

折衷派における各行の基礎符号生成の原則は、ガントレット式に見られたア列を基準（父音）としてイ列は尾部に小円を付し、エ列はそれを 2 倍線とし、オ列はア列を 2 倍線にするものであった。熊崎式においても同様の構成がとられ、ウ列にはア列符号の尾部に楕円を付して表す規則も一部にとられた。このような熊崎式の基礎符号生成法は、早稲田式にも影響が認められる。

図 2-43 に示すように、太平洋戦争後、さらに吉崎謙太郎は 1954 年 4 月、早稲田式をベースとしたと推定される日本速記研究所式速記法、つまり日速研式を完成した。日速研式の基礎符号で、早稲田式と類似する規則性は、例えば早稲田式のオ列とウ列の符号を交換する例が [ス] ↔ [ソ], [ル] ↔ [ロ] に見られ、[ノ] には早稲田式の [ヌ], [ニ]・[ネ] には早稲田式と同じ符号、ほかに [ホ] → [フ], [モ] → [ム], [ヨ] → [ユ] のように入れかえたと判断できる符号が認められる。

また、京都を地盤にワコーの株主総会の速記も担当した、中村優里（ゑつ）が 1968 年に出版したコクサイ式においても、熊崎式におけるオ列の符号がア列に入れ換えられる規則性があり、イ列とオ列の関係でも [キ] ↔ [ケ], [シ] ↔ [セ], [ニ] ↔ [ネ], [ミ] ↔ [メ], [リ] ↔ [レ] の入れかえが認められる。

両式の符号イメージは運筆法の違いから異質な印象があるが、田鎖式から発達してきた折衷派における基礎符号の構成戦略であると言える。

	アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ
日速研式 吉崎謙太郎 1954			
コクサイ式 中村優里 1967			
	タチツテト	ナニヌネノ	ハヒフヘホ
日速研式			
コクサイ式			
	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ
日速研式			
コクサイ式			

図2-43 経済の高度成長期に折衷派の改良方式が続いた

日速研式(大阪)とコクサイ式(京都)

兼子次生作成

日速研式では、吉崎が1955年に事情があり速記界から次第に離れる方向へ進んだため、一時期関西学院大学における部活連携を働きかけようとしたものの結実しなかった。また、1968年には後継者の中西国夫が西来路の指導を受けて速記理論を改訂したユニ式速記法を公表し、その普及活動の中で、立命館大学在学中の塩冶優が速記同好会を組織するなど関西を中心に普及活動を進めた。しかし、中西や、同門の「日本ユニ速記の基礎と練習編」を出版した小東(中村)一恵が相次いで夭折して普及活動は途切れた。ただ、愛知県瀬戸市の田辺則男が中部地方を中心に同式の地盤を固めたが、後継として山田早苗が指導に当たっている。

速記界の評価は、日速研式は早稲田式の基礎符号のウ列とオ列を入れかえた点を強調されてきた。しかし、運用された動態符号は早稲田式においても見られる運筆理論が認められており、高速度対応に達する方式であることが特徴であった。